

- ・ 実務実習においては、総括的評価と形成的評価が現実にそぐわない。例えば、「総括的評価で不合格＝留年、実習打ち切り」ではなく、実際は総括的評価が保留され、再試験などの機会が与えられることが多い。この点に関するタスクフォースの説明や介入を統一した方が良い。(複数)
- ・ 色々な評価方法を学習しながら、各学習方略における評価の問題点について検討する必要がある。例えば、ある科目を PBL 形式で学習するとき、個々の学生によって修得した知識の深さと内容に差が出ることもあり、通常のペーパー試験による評価は不公平であるように思う。また、ペーパー試験の実施によって、高得点を取るための PBL になりかねない。
- ・ プロダクトにおける評価の「時期」が測定～価値判断の時期なのか、意思決定の時期なのか、形成的評価と総括的評価の区別において重要だが、測定・価値判断・意思決定の手順についての理解が十分でないため、測定＝意思決定という認識で評価を捉えてしまう傾向が強い。
- ・ 形成的評価と総括的評価については、内容がわかりやすいように新しい用語に変えて説明してもよいのではないか。「総括的評価は必要か？」という内容的な議論を行う前に、用語的な問題で理解が進まない現状があるように思う。
- ・ 形成的評価は、最終評価に含まれないと説明しているが、実際の教育現場では学習途中で行った評価も成績評価に入れていることが多い。これに則した説明を行うべきである。
- ・ 評価のプレ、ポストアンケートの内容に適当でない、あるいは誤解を招く表現がある。
- ・ 「評価」については、実際の実習ではあまり活用されていないのが現状である。総括的評価の権利は「実習中止」しか表現できない現状では、より形成的評価に的を絞った説明の方が良い。こういった理解を深めるためには、問題のある評価表をモデルとして改善方法について議論を行うなどの工夫が必要である。

(7) 問題点への対応

- ・ 変更の必要はない。(複数)
- ・ このセッションは不必要かもしれない。
- ・ なぜ最後に問題点への対応のセッションがあり、なぜ二次元展開を扱うのかについての WS における位置づけが理解されていないので、説明に工夫が必要である。
- ・ このセッションの必要性について疑問がある。
- ・ 実務実習が始まっているので、実際に実習現場で発生した問題点の解決策についても取り上げる必要がある。
- ・ KJ 法のテーマに実習現場で問題となる「セクハラ・パワハラ」、「大学毎の評価表」、「施設訪問の在り方」などを取り入れて、その対応について議論を行うべきである。
- ・ 後半の説明では、最初にアクションプラン(対応策)を出してから力野分析を行うという手順を説明する必要がある。

- ・ タスクフォースが受講者と同じ目線で議論に参加してしまい易いセッションである。これを是とするか非とするか、非とするならばどうやって実務実習の実情を理解してプロダクトを作るのが課題である。
- ・ このセッションにおけるタスクフォースの呼びかけは、薬学教育への意識向上のために効果的である（勿論、タスクフォースの力量にもよるが）。
- ・ アクションプランについての説明が非常に曖昧である。対応策の列挙だけでは受講者の満足度も低くなるので、しっかり議論してもらうならこれを作業の前に説明すべきである。
- ・ 実務実習が始まって3年目を迎える現時点で、マスタープランとアクションプランに分けて考えることに意味があるとは思えない。
- ・ マスタープランの作成で終わらず、必ず1つの対応策についてはアクションプランの作成を行うようにすべきである。
- ・ あくまでマスタープランを作ることを目的にする方が、限られた時間の中ではよい議論ができる。この場合、実務実習の問題点など、既にアクションプランが実行されているものが課題になると現状との整合性が取れなくなることに違和感がある。したがって、KJ法のテーマを実務実習から離れたものにしても良いと思う。
- ・ 対応策として出た内容が、すでに実施されている場合は、タスクフォースがどのように介入・助言したらよいのか。
- ・ 力関係分析は、具体的な対応を進めていく上で重要な手段であるが、単なる紹介に留まっている。これについて具体的な例を挙げて説明することも難しいので、理解が進まないことから、このセッションでは必要ない項目ではないか。

(8) 医療人教育改革に関する講演

- ・ 変更の必要はない。(多数)
- ・ 医療人としての在り方が心に届く講演である。(複数)
- ・ 講師をお願いできる方を増やすべきである。(複数)
- ・ DVDの場合どうしても臨場感が弱いので、できれば生の講演が望ましい(複数)。
- ・ 講演内容と講演者の選択がむずかしいが、医療人教育として重要な内容(倫理、多職種間のコミュニケーション、プロフェッショナルリズム、チーム医療など)について、DVDではなく薬剤師のモチベーションを高めることができる講師による生の講演が望ましい。
- ・ 講師を招へいするのかDVDを用いるのかについては、費用とその意義について個々のWSでどのように考えるのが曖昧である。「チーフタスクフォースが決定する」とするのが良い。
- ・ 講師は、医療人教育の経験が豊富な医師に限定すべきである。
- ・ 他医療職、とくに医学サイドから「薬学、薬剤師への期待」を熱く語っていただくのが

重要で、薬学部所属以外の講師が望ましい。

- ・ 演者は医師である必要はない。6年制薬学教育の趣旨を話す講演でもいい。
- ・ 中島先生のご講演に勝るものはないと思うが、新しい話題に即応した内容に更新していく必要がある。
- ・ 海外（米、英、独、シンガポールなど）の医学教育の紹介も含めた内容にして欲しい。

(9) 薬学教育改革の現状に関する講演

- ・ 変更の必要はない。（複数）
- ・ 特に必要はない。
- ・ 見直しが必要である。（複数）
- ・ 各 WS での講演内容の統一が必要である。（複数）
- ・ 10,000 人養成は達成されたので、異なる講演内容が必要である。カリキュラムなどについての補足説明に充てる必要性もある。
- ・ WS を通じて、理解しにくかった部分を補足するような内容、WS と実際の実習とのギャップを埋めるような内容にしてはどうか。
- ・ 総評的要素を加味した質疑応答があっても良い。
- ・ 6年制教育への変革の必要性とその意義を含めて、後進育成の重要性とそれを果たす責務についての講演が望ましい。
- ・ 各 WS で、コアとなる内容を決める必要がある。薬学教育改革の歴史、見学型から参加型実務実習への移行、年限延長にあたっての条件、共用試験の意義と内容などは、今後も常に発信していく必要がある。
- ・ WS の歴史よりも、医療（薬剤師）及び薬学教育を取り巻く、現状と課題、展望についての情報提供が望ましい。
- ・ 学会等で実務実習に関する調査報告は多数されており、そのレビューや各施設の取り組み例の紹介などを取り入れることが望ましい。
- ・ 薬学人の使命、医療人としての薬学人・薬剤師などの内容を加えるべきで、薬学部所属の講師が望ましい。
- ・ 大学における教育内容についても取り入れることが望ましい。

(10) その他

- ・ WS のプログラムは、かなりの年月、医学をはじめとして利用されていたものを薬学でも利用したものであるので、非常によくできている。2日間の中で、変更を必要とするものはないといってよい。今後、次世代の薬剤師を育成するためのニーズが変わった際改善（異なる内容と変更すること）が可能なセッションは、第一が（9）の薬学教育改革の現状、その次が（8）医療人教育の改革だと思う。マイナーチェンジとして、KJ法のテーマの変更は考えてよい。また、学習目標のユニットについては、変更を考えて

もよいと思う。このとき重要なことは、新しいユニットが知識を教えることが重要なユニットであってはならないことであって、ユニットの SBOs を想定したときに、学習目標の 3 領域の中で態度領域が最も重要な SBOs になるユニットでなければならない。そのためには、現実にはないユニット（ユニット名）であってもよい。ただし、関連ユニット、コースなどを適正に選び、作業できるようにするのは容易ではない。

- 現在の WS は、内容、スケジュール共によく練られており、今後も実習指導未経験者用の WS として実施するのであれば、このままでよい。
- アドバンスト WS とは異なり、基本的なスタイルを踏襲することが肝要である。
- 現在のプログラムの完成度は高い。したがって、改善点というよりは、むしろこれまでのプログラムを如何に継続していくかを工夫することが重要である。
- 現行の WS の目的が教育の在り方を学ぶということにあることは理解できるが、目的としては薬剤師が薬学教育に参画することの動機づけが最も重要と考えるので、根本的な見直しを行う必要を感じる。
- 10 年以上この形で実施してきた内容を変更することは必要ない。改善と言うよりは、現行 WS を受講した後のフォローアップあるいはアドバンスト WS が必要であるので、両者を混同しないように進めるべきである。
- 実務実習指導薬剤師の認定要件で WS の時間数等が規定されている。内容的な改善は必要であるが、時間数などのコアな部分の変更は、認定指導薬剤師資格が一物二価になるので反対である。
- 趣旨は理解できるが内容が漠然としていて実務実習に結び付きにくいので、もう少し実習に即した内容が望ましい。
- 実務実習が始まっているので、実習現場で有用な内容を取り入れることが望ましい。
- 当初の新鮮さが減弱してきている。
- 受講者に対して WS の内容と実務実習での具体的な指導の関連性について明確な説明がなく、またタスクフォース間での共通の認識も欠けている。WS の内容が実務実習に活用できてないという受講者の意見を精査し改善を行う必要がある。
- 現行のプログラムは、指導薬剤師のために構成されている部分が多く、薬学教育者としてのプログラムとしては対応していない。WS のタイトルが薬学教育者ワークショップになったことを受け、対象者別のプログラムを構成する必要がある。
- 各 S が病院、薬局、大学の受講者で構成されることが望ましい。大学からの受講者は、2 回目でもよいので、必ず入れるようにする。
- 大学からの受講者が不足しているが、無理に入れる必要はない。
- カリキュラムの 3 要素を理解するのに時間がかかり、消化不良のまま次のセッションに移行するので混乱する受講者がいるので、説明や配布資料の改善が望まれる。
- プレゼンをもっと短くわかりやすく抜本的に見直す必要がある。
- プログラムの順番を入れ替え、順番を KJ 法・問題点への対応を行ってから、カリキュ

ラムプランニングを行った方が受講者には理解しやすい。

- 十分な学習効果を得るためには、プログラムの時間配分（必要とされる時間）を見直す必要がある。
- 教育評価のセッションのアンケートは、「T」「F」の2段階であるが、総合アンケートでは「どちらともいえない」の選択肢があり3段階である。そのことが、正解を少なくしている。後者も2段階にした方がよい。
- 目標、方略、評価の本質を理解するのに時間がかかり、消化不良のまま、次のセッションに移行し、混乱する参加者がいるのではないか。
- 配付資料について見直す必要がある。
- プレゼンテーションは、パワーポイントに統一すべきである。
- コンセンサスゲームの表彰は、答え（NASA の見解）を知っている受講者がいるので、最少得点者ではなく最大得点者へ贈るように切り替えることが望ましい。
- 受講者のことを考えると報告書は CD ではなく冊子形式の方がよい。
- 情報交換会に費用をかけない。
- 講師の交通費、謝礼などを考慮した場合、各地区におられる方に優先的に依頼することが望ましい。地域医療の連帯と覚醒のためにも有用である。
- 自戒を含め、タスクフォースが「教授錯覚」に陥っていることも散見される。
- タスクフォースのスキルアップが必要である。

2-2. 現在のワークショップの運営について、今後改善すべきとお考えの点についてお書きください。

(1) 実施回数

- ・ 地区によって、必要な回数が異なる。
(以下省略)

(2) 日程

- ・ 2日間が妥当である。(複数)。
- ・ できるだけ連休が望ましい。(複数)
- ・ 連続の2日間で完結させる日程が効果的である。
- ・ 連休開催、日日開催が参加しやすい。
- ・ タスクフォースの負担を考えると連休開催は避ける方が望ましい。
- ・ 実務実習に活用できるWSにするのであれば、2日程度の追加があった方がよい。

(3) 会場

- ・ 会場費が安いこと。薬科大学・薬学部が会場を提供することが望ましい。(複数)
- ・ 会場の配置(P会場・S会場・タスクフォース控室・事務局)に考慮が足りない場合がある。

(4) 受講者の選び方

- ・ 各地域の担当者の判断にゆだねられている部分も多く順番が回ってこない方の一部には不満もある。受講者の選択方法を明示し、透明性を持たせることが重要である。
- ・ 府県の薬剤師会、病院薬剤師会が推薦を行い、調整機構委員会で決定する現在の方式でよい。(複数)
- ・ 養成必要人数をきちんと割り出して、それに基づいて計画的に受講を実施する。
- ・ 各Sに1名の大学教員を入れることを必須にすべきである。
- ・ 日本薬剤師会に個人会員として入会することを条件して、日本チェーンドラッグストア協会などの施設の薬剤師の受講が必須である。
- ・ 単独県の開催の場合、他県の受講者を入れて顔見知りが多くなる点の弊害を解消する必要がある。
- ・ 若い薬剤師の受講を促す必要がある。
- ・ 受講を希望しても受講枠の制限により機会を与えられない人がいる。受講費を県薬が負担している場合にこの負担軽減のために受講者枠を制限しているのであれば、参加費を自己負担してでも指導薬剤師を希望する人を優先すべきである。
- ・ グループ薬局、施設内複数希望、個人希望への対応の方針を明示すべきである。

- ・ 大学教員の受講者（WS 未経験者）が足りない。
 - ・ 病院薬剤師の枠が少ない。
 - ・ 希望者からの選抜でよいが、実際に実務実習を受けて教育を行う意欲のある人を選んで欲しい。
 - ・ 既に実習生の受け皿は確保できているため、同一薬局で2人目、3人目の認定薬剤師の希望があれば、積極的に受け入れてもよい。
 - ・ 調整機構主催のWSについては、できるだけ各県に平等に受講者を振り分ける。
 - ・ 大学主催のWSについては、受入施設の充実・確保が目的であり大学の意向を重視する。
 - ・ 実務実習を引き受けてくれる施設の薬剤師を優先する。
 - ・ 現状に即した受講者決定方法の例として、
 - * 受講者は、2団体（事務局担当の協賛団体（以下、協賛団体とする）、地区調整機構）から推薦された受講者に限る。
 - * 1S=9人の受講者枠を2団体（協賛団体：地区調整機構）それぞれで、5人：4人とする。（過半の5人を協賛団体の推薦枠とする）
 - * 協賛団体は、地区調整機構に加盟する団体（薬剤師の団体（薬剤師会、病院薬剤師会など）と大学）のいずれかになる。以下、団体と表記する。
 - * 受講者の選別方法：各団体は、責任をもって受講者のウエイティング・リストを作成し、その順に、地区で開催されるワークショップの受講者を以下の要領にしたがって推薦する。（各団体は、ワークショップごとに、受講予定者枠にあわせて、作成したウエイティングリストから、受講者を推薦する。）
 - * 受講者の区分を薬局・病院・大学とする。
 - * 大学枠で受講する教員1名は、調整機構を通じて推薦された大学教員（原則として、附属病院などに勤務（兼務）していない大学教員）とする。
 - * 事務局を担当する協賛団体が薬剤師会、病院薬剤師会、大学のいずれかによって、以下の例①～③に従って受講者を選定する。
- ① 薬剤師会が協賛団体の場合

薬剤師会から推薦5：調整機構から推薦4（薬剤師3：1大学教員）

この場合、調整機構推薦枠薬剤師3人の内訳は、事務局を担当する薬剤師会に所属しない薬剤師、または、緊急に認定を取得する必要の生じた薬剤師（病院、薬局を問わず）を受講させる。ただし、これらの受講希望が無い場合は、事務局担当団体からの推薦にまわす。残る1名は大学教員（薬科大学などが無い地区など、やむをえず、教員枠がすべて充当できない場合は、調整機構の判断により、病薬か、協賛団体の推薦枠としてもよい。）
 - ② 病院薬剤師会が協賛団体の場合

病院薬剤師会から推薦5：調整機構から推薦4（薬剤師3：1大学教員）

この場合、調整機構推薦枠の薬剤師3人の内訳は、事務局を担当する病院薬剤師

会に所属しない病院の薬剤師、または、緊急に認定を取得する必要の生じた薬剤師（病院、薬局問わず）を参加させる。ただし、これらの参加希望が無い場合は、事務局担当団体からの推薦にまわす。残る1名は大学教員1名（薬科大学などが無い地区など、やむをえず、教員枠がすべて充当できない場合は、調整機構の判断により、病薬か、協賛団体の推薦枠としてもよい。）

③ 大学が事務局を担当する場合

大学付属病院などから推薦5：調整機構から推薦4（薬剤師3：1大学教員）

この場合、調整機構推薦枠3人は、薬剤師会から2名推薦枠をとり、病院薬剤師会からの推薦1名、または、緊急に認定を取得する必要の生じた薬剤師（病院、薬局問わず）1名を参加させる。ただし、これらの参加希望が無い場合は、事務局担当団体からの推薦にまわす。残る1名は大学教員1名（薬科大学などが無い地区など、やむをえず、教員枠がすべて充当できない場合は、調整機構の判断により、病薬か、協賛団体の推薦枠としてもよい。）

(5) 参加費

- ・ 現状でよい。(複数)
- ・ 運営を円滑にするためには、もう少し高くして欲しい。(複数)
- ・ WSの受講は認定要件の一部なので、時期や地域によって参加費が変動することは望ましくない。参加費の差については不公平感があるので、地域ごとの事情はあるが、一律に設定することが望ましい。
- ・ 開催実費を参加者数で割った額を原則とする。
- ・ 調整機構から補助があるときは、開催実費から補助額を減じた後、参加者数で割る。所属する団体が参加費を肩代わりしたり、軽減することについては、各団体（3つの区分それぞれで）合意があれば、妨げない。実習の指導資格と考えると、個人の資格であるので、受講者の負担とするのが望ましい。教員は、実習指導資格はとれないこと、複数回の参加が必要になること、FDの一環として大学としての教員の資質向上の目的で参加することもあるので、大学が負担することは問題ない。
- ・ できるだけ安価になるように、経費削減の努力をする。
- ・ 誰が負担するかは、各地区、各組織に任せればよい。
- ・ もう少し下げて欲しい（15000円～20000円）。
- ・ 自己負担なしはあり得ない。受講時に倍額徴収し、指導薬剤師として登録したら半額返済と登録率は高まる。

(6) 運営組織

- ・ 現状のままでよい。(複数)
- ・ 地区調整機構を中心に、大学教員、地区の薬剤師会、病院薬剤師会との連携がうまくい

っている。運営費は各大学学生数による拠出金から成り立っているが、このままの金額を維持して良いのか、今後検討の必要があると考える。

- ・ 運営組織は、地区調整機構で協議し、地区調整機構に加盟する3団体の中から協賛団体（事務局を担当）を選定する。協賛団体が大学でない場合は、地区に薬科大学（または、薬学部のある大学）がある場合、大学の協力を得て、会場、チーフタスクフォース、タスクフォースなどを決定し、参加者を上記（4）の要領で選定する。大学の協力が得にくい地区は、地区調整機構が運営組織の決定に協力する。運営の責任者は、承認時に申請されたチーフタスクフォースとする。
- ・ 主催・共催など、いろいろな組み合わせがあつてよい。
- ・ 今後できるだけ早い時期に薬剤師会と保険薬局協会で一緒にやれるように話し合う必要がある。
- ・ 薬剤師会、病院薬剤師会所属のタスクフォースが割合が少ない。
- ・ 開催予定、人員配分等の決定が不明瞭である。
- ・ 他地区のメンバーが入れば、緊張感が増してよい。
- ・ 薬剤師会に依存しすぎており、薬剤師会非会員の参加がむずかしい。
- ・ 地区薬剤師会、病院薬剤師会、大学間でWS実施委員会を常時設置しておくべきである。チーフタスクフォースは地区で、シニアタスクフォースは他地区から呼ぶべきである。タスクフォースはボランティアで行うのが原則であるが、特定のタスクフォースに過大な負担がかかるのは避けるべきである。
- ・ 地域の実情により柔軟に対応すべきである。ただし、大学の参画は不可欠である。

(7) タスクフォース

- ・ タスクフォースは全ての職種からバランスよく参加する必要がある。大学教員のタスクフォースが熱心であれば、学生を送り出す側の努力が伝わるし、病院、薬局のタスクフォースが熱心であれば、各々の組織が学生の指導に力を注いでいることが受講者に伝わる。
- ・ タスクフォースはプロダクト作成に対して影武者・空気かもしれないが、強い思いを受講者にぶつけることも必要であろう。
- ・ WSの円滑な運営と相応のプロダクト作成のために、優秀なタスクフォースを選ぶ傾向が強く、特定のタスクフォースに限定される。地元のタスクフォースの協力を増やすべきである。
- ・ 最近のWS開催数の減少から、タスクフォースの人選は固定化されている傾向にあるが、総合的に判断すると小人数精鋭で行うのが効率的である。ただし常に若手タスクフォースの育成も視野に入れておくことも必要である。
- ・ 1Pあたりタスクフォース数は7名以上であることが望ましい。
- ・ S会場のタスクフォース数は2名または3名とする。

- ・ Pの責任者となるタスクフォースは、S会場を担当しないことが望ましい。
- ・ S会場を担当するタスクフォースのうち一人は、5回以上のタスクフォース経験のあることが望ましい。
- ・ S会場を担当するタスクフォースの所属は、同じ区分（薬局、病院、大学）でないことが望ましい。
- ・ 5回以上の経験のある者を、1Pあたり4名以上と、経験の少ないものを1Pあたり3名以下とする。このような経験の多寡を勘案して、チーフタスクフォースは、各区分の団体に、互選により、以下（8）の練習会と、前日練習に参加できる候補者を推薦してもらい、その中から選出することが望ましい。
- ・ 実務家教員のタスクフォースがあまりにも少ない。彼らが臨床現場の情報を収集するという意味も兼ねて、タスクフォースとして参加すべきである。
- ・ タスクワークについては、P会場ごとに、以下の練習会、前日練習でワークショップの内容に関して、タスクフォースが疑問に思うことをできるだけ解決し、内容の理解にコンセンサスを得ておくことが重要である。プレゼンテーションの方法、当日のタスクワークなどについても、2回の練習の機会に経験者の体験から学ぶことが望ましい。
- ・ タスクフォースのスキルアップのためのWSを行う必要がある。これまで全国レベルで実施したことがあるが、今後各地区でもやれるように、そのパッケージ（内容も含めて）を早急に作ることを望まれる。
- ・ 「タスクの心得」をまとめて配布して欲しい。
- ・ 地方では、WSの回数が減るので、タスクフォースをできる人の維持がむずかしい。
- ・ タスクワークは地区間で差がないように統一すべきである。
- ・ 経費を考えるとSに2人・Pに7名が適当と考えられる。Sでは大学教員と実務薬剤師のペアが望ましい。
- ・ 実務家教員のタスクフォースが少ない。彼らが臨床現場の情報を収集するという意味も兼ねて、タスクフォースとして参加すべきである。
- ・ 他地区とのタスクフォースの交流、特にベテランタスクフォースの参画は望ましい。
- ・ 「シニアタスクフォース」は有益であるが、名称はなじまない。
- ・ タスクフォースの選び方は、チーフタスクフォースに任せればよい。もし人選や運営に問題があれば、シニアタスクフォースを介して改善を行えばよい。
- ・ タスクフォースのプレゼンテーションはWSで最も重要な部分である。したがって、主催者が経験者と相談し、ふさわしい人選を行うべきである。
- ・ 余裕があれば人数は多い方がよい。
- ・ タスクフォースは、公募の後、審査を行い選定する方法もよい。また、WSを継続して実施するためには、各都道府県内でWSを単独で行えるように十分な数を養成する必要がある。

(8) 練習会

- ・ タスクフォースのプレゼンテーション能力の向上の他、カリキュラムの理解が深まる、タスクフォース同士のチームワークが確立するなどのメリットがあり、必須である。
- ・ タスクワークや意思統一の観点からも必要である。新人でセッション担当者は、前日準備より前に一度練習をしておく必要がある。
- ・ 形骸化しているので、その意義を共有化する必要がある。
- ・ 初心者、経験の浅いタスクフォースの事前練習会は必須である。実際に、以前よりも練習不十分な状態で本番を迎えているタスクフォースが増えている。
- ・ ベテランタスクフォースが個人的な意見を強く出さないように注意することが必要である。
- ・ ディレクターの判断で実施するかどうかを決めればよい。
- ・ プレゼンの最低限のシナリオ化（文字化）をすることで、練習会の短縮ができる。
- ・ タスクフォースの責務は、プレゼンのみではない。練習会を通して、介入の方法などについて事前合意を行う必要がある。
- ・ 練習会、前日練習は必要である。実施方法の概要は以下のとおりとする。
 - ④ 開催 2 週間～1 週間までに、主にプレゼンテーションの練習会を実施し、ここで、ワークショップの内容、タスクフォースとしての仕事の確認、プレゼンテーションの内容の確認とチェック、スケジュールの確認を行う。チーフタスクと経験のあるタスクフォースは、プレゼンテーションとプレゼンテーションで参加者に伝えるべき内容について、フィードバックをする。
 - ⑤ 前日練習では、プレゼンテーションとスケジュールの最終確認を主とし、P 会場での役割分担の決定、写真撮影や情報交換会会場を含め、P、S 会場の場所と文房具などの確認、配布物の小分けを行う。
 - ⑥ シニアタスクフォースのように経験の豊富な他地区からのタスクフォースが参加する場合、練習会から参加することが望ましいが、前日練習には、必ず参加してフィードバックを行うこと。

(9) その他

- ・ 最重要課題は、後継者育成、特に大学教員である。この WS に関わっていることが薬学教育の中で尊重・評価される状況を作り、薬学教育の専門家を育てる必要がある。それらの方々に WS のプロとして全体を牽引していただきたい。WS はひとつの方略に過ぎないが、テキストにたびたび登場する SPICES の提唱者である Harden 教授は、その後には Outcome based education を提唱し、我国の医療人教育に強い影響力を与え続けている。薬学には教育を研究の対象とするリーダーが必要であり、その集団が WS にエネルギーを注ぐことが継続的な発展には不可欠である。
- ・ WS がこれまで全国規模で行えて来たのは、このシステムが良かったとの証明でもある。

基本形は保ちながら、少しずつ改善して行くことが望ましい。

- チーフタスクフォースの意向で、普遍性に欠ける内容になる場合がある。偏った意見は慎む方よい。
- 地区の薬剤師会が中心となって WS の運営方法の見直案を作成し、それを地区全体の薬局・病院・大学間で協議して WS の運営方法を決定している。つまり、現在でも常に改善しながらの運用を行っている。したがって、改善点というよりはむしろこれまで築きあげた 3 者間での円滑な連携体制を如何に継続していくかを工夫することが重要である。
- 練習会を、WS 修了者の復習の場にできればよい。
- 参加者によるタスクフォースの評価は、暗黙的にいい評価を強要している可能性もあるので、受講者への伝達方法について配慮する必要がある。フィードバックに用いるのであれば、反省会時にタスクフォースだけで提示してはどうか。
- タスクフォースについては十分に練習を行い当日に臨んで欲しい。
- 経費の節減がさらに図られることが望ましい。

2-3. ご自分が指導薬剤師としてご担当された実務実習、あるいは大学での教育活動において、ワークショップで行ったカリキュラムプランニングや教育技法を活用された例がありましたら、お聞かせ下さい。

- ・ WS の手法は、教育面では大変役だっている。さらに、WS を通じて様々な分野の方々と知り合いになり、教育や研究のネットワークづくりに役だっている。
- ・ 大学では、モデル・コア・カリキュラムにより、ある程度のカリキュラムプランニングができ上がっているが、学習方略、教育評価については担当教員に任されているので、WS で学んだ内容が役立っている。
- ・ 形成的評価を実務実習でとりいれ、プレテスト、ポストテストなどを行った。
- ・ 現場において KJ 法を用いて、問題への対応や問題解決を行った。
- ・ 技能項目の SBO を、学習者が身に着くように、学部の実習をグループ実習（4 人一組、あるいは 2 人一組）から一人での実習（機器を使用して 4 人一組でも、一人ずつ測定する試料は、異なるものを調製させるなど）へ変更した。
- ・ カリキュラムプランニングを経験したことで、カリキュラムの 3 要素に関する知識が実務実習事前学習の具体的なプログラム作りの参考になっている。授業改善を行う際に必須の知識であった。例えば、1 日の実習の時間配分の決定の考え方（学習方略）、学生の能力伸長度の測定のための評価表の作成（教育評価）など。
- ・ SGD や PBL のファシリテーターを務める際に、タスクフォースの経験が非常に役に立っている。
- ・ 形成的評価を意識して行うようになり、タスクワークのおかげで、人の意見をしっかりと聞き、論理的に話をするができるようになった。さらに、問題にぶつかったときに力野分析で学んだマイナス因子を弱める事を意識し、目標の明示し、評価基準の設定をすることで、他のスタッフの意識も少しずつ変わってきて、回を重ねるごとに実習がスムーズに行えるようになった。
- ・ 当院で行っている実習の中に組み入れ、SGD をできるだけ行うようにしている。講義のみではなく、複数の教材を使うことにより、同じような内容でも繰り返し学習することで、理解がさらに深められる。
- ・ 日々の講義、実習においてワークショップで得た考え方、手法は十分に活用出来ているかの判断は困難であるが、いつも利用しようと考えている。
- ・ 実務実習が始まるまでの支部担当者の研修会、受入後指導薬剤師のアドバンス WS やこれから受入する指導薬剤師研修会や学校薬剤師研修会で、SGD による KJ 法から二次元展開法を利用して問題点对応策までを実施した。
- ・ GIO、SBOs 等の考え方を本学のシラバス作成に全面的に応用している。SGD 等の教育の手法を多く導入している。他学部も含めた全学的な教職員研修にワークショップの内容の殆どすべてを導入している。その他、薬学部教育のあらゆる局面で、WS で行った

カリキュラムプランニングの内容を活かしている。

- ・ 形成的評価や PNP は、指導時に役立っている。
- ・ 感染対策・緩和ケア・治験などの実習において実際の症例に基づいて SGD や学生同士のロールプレイを行っている。
- ・ 大学での授業科目（4年生の事前学習関連科目や6年生のアドバンスト教育科目）の中で、WS の内容（オリエンテーション、KJ法、学習目標、学習方略、教育評価、問題点への対応の各スライド）を紹介することを取り入れた授業を行うことで、学生自らが、カリキュラムプランニングを行えるようになることを目標とする教育を行っている。
- ・ 実務実習の中で、調剤過誤等における問題点の抽出を、KJ法を用いて SGD で行っている。
- ・ 新人教育、幹部職員への指導に役立った。企業の新人研修に利用できた。
- ・ 実習指導書として、病医院薬剤師会推薦の書籍を使用した。学生を評価することの責任の重大性を感じ、評価基準を指導者の中で協議して決めた。
- ・ プレテストとポストテストを活用している。
- ・ PNP でフィードバックすると学生のモチベーションが上がり、その後の実習への取り組みが変わるのが実感できる。
- ・ H22 年度の実務実習終了後に、実務実習における問題点の抽出と、次年度以降の実習（特に薬局実習）に向けた改善策を検討する、「学生－指導薬剤師(薬局・病院)－大学教員」合同のワークショップ形式による情報交換会を開催した。今年度の実習終了後にも昨年と同様に、ワークショップ形式による情報交換会を開催する予定である。

3. ワークショップで得た薬学教育に関する知識や情報、基礎的な教育技法を実務実習の指導に活かすためには、さらにアドバンスワークショップが必要と考え、現在、全国的な実施に向けて検討を行っております。このようなアドバンスワークショップについてご意見をお聞かせ下さい(下記の項目の中から該当するものを選んでお答えください)。

(1) 開催の必要性

- ・ 必要である。(多数)
- ・ 今後各地区で継続的に行うことが望ましい。
- ・ 実際に実務実習が始まり、多くの問題点が出てきた。これらの問題点を共有し解決策を立てるために必要である。
- ・ 連携や情報の共有、モチベーションの向上、地域リーダーの発掘、大学と現場の連携などの効果が大きいので開催するべきである。現状では、教育技法を実際に活かすことは難しい。
- ・ 実務実習も2年目を終了する時期になってきており、この時点における指導薬剤師への実施は有効である。
- ・ 実務実習で実際に学生を受け入れた後では、受け入れ前と考え方や問題点も変わっているので必要である。WSを受講したことを思い出す意味でも効果的である。
- ・ 再講習のない資格については、一般的に世間からは信用のない資格とみられているので、開催の必要性は大きい。
- ・ 現行のWSで得た知識・技法を活用しカリキュラムプランニングの考え方を実践している指導薬剤師には開催の意義は小さい。
- ・ 学生がよりよい参加・体験型実習を行うために、実務実習を受け入れた経験に基づいて問題点を議論したい。
- ・ 指導薬剤師に対するWSに関するアンケートの結果を反映できるようなアドバンスWSの開催が望ましい。
- ・ ワークショップの上部組織として、問題点、改善点、グッドアイデアを検討する組織があってもよい。
- ・ 現場のニーズや大学側からの要望に即した内容であれば実施する意義はある。
- ・ 明確な目的に合わせて、それを求める参加者と、それを教育できる教育者がいれば絶対やるべきである。会を開くことが目的となり、内容が精査されていないものであれば、やるべきではない。
- ・ 認定実務実習指導薬剤師の更新の条件として必要となれば、現在取得している指導薬剤師が全員対象となり、アドバンスWSの開催に莫大な費用と労力がかかる。一方、対象者の選抜するのであれば、その方法が課題となる。
- ・ 現行のWSで得た知識・技法を活用しカリキュラムプランニングの考え方を実践している指導薬剤師には開催の意義は小さい。

- ・ アドバンスト WS を受講した人が、次の指導者を養成する仕組みが出来るなら必要である。単に認定のコレクションのアイテムとなるなら不必要である。
- ・ アドバンスト WS とフォローアップ WS を分けて実施すべきである。

(2) 開催規模

- ・ 地区単位（支部単位）、県単位で開催する。（多数）
- ・ 各地区の独自性を尊重する。
- ・ 全国規模及び地区単位のもの両方必要である。（複数）。
- ・ 規模は、あまり大きいと運営がむずかしいので、府県、あるいはブロック単位として、各地で開催することで、回数を増やすほうがよい。
- ・ 1 P（30 人程度）位の小規模できめ細かく行う方がよい。
- ・ 目的に応じて、様々なスタイルがあつてよいと思われるが、現在の WS 形式の規模を基本とする。

(3) 開催日程

- ・ 半日（複数）
- ・ 1 日程度（多数）
- ・ 参加者の負担を考えれば、日曜日 1 日で終わる方がよい。
- ・ 1～2 日（複数）
- ・ 2 日（複数）
- ・ 2～3 日
- ・ 様々なスタイルがあつてよい。

(4) 運営

- ・ 制限をつけず、自主的に企画・運営されるものの全てを尊重する姿勢が望ましい。
- ・ 全国は薬学教育協議会、地域は各県薬剤師会や大学が運営する。
- ・ 地区調整機構が主催する。（多数）
- ・ 現在のワークショップと同様の運営組織がよい。（複数）
- ・ 調整機構、薬剤師会、病院薬剤師会の共催とする。
- ・ 全国規模の開催は薬学教育者ワークショップ委員会が主催する。
- ・ アドバンスト WS は薬学教育協議会が主催し、フォローアップ WS は薬剤師会単位で主催する。
- ・ 薬学教育協議会で最終的な質の担保を図る必要があるが、各地区の調整機構へそれを委任するべきではない。なぜなら、地区調整機構は実務実習（特に配属施設の割当）が円滑に進んでいる現状を考えると、近い将来解散する可能性が高いので、地区調整機構の負担をこれまで以上に増やすことは得策ではない。

- ・ 大学毎が責任を持って（会場、費用など）運営するのが望ましい。

(5) 参加者

- ・ 実務実習指導薬剤師。（多数）
- ・ 実務実習指導経験者。（多数）
- ・ 実務実習指導経験者と大学教員。（多数）
- ・ ワークショップの受講者。（複数）
- ・ 参加を希望する方全てを対象とする。（複数）
- ・ 必ず大学教員（実務家、非実務家を問わない）が入るべきである。（複数）
- ・ 学生、他職種の参加も有益である。（複数）
- ・ 薬剤師全般
- ・ 認定指導薬剤師は受講後 3～5 年に一度の参加義務を設ける。

(6) 参加費

- ・ 有料（実費のみ）。（多数）
- ・ 無料。（複数）
- ・ 更新制度とするなら有料とする。

(7) 通常のワークショップとの関連性

- ・ 特に必要ない。（複数）
- ・ 「アドバンスト」と銘打つ以上、新しい試みを行って、よければ普及する役割がある。一方、通常の WS は、認定要件という性質上ある一定の規格の中で行う方がよい。
- ・ 互いに問題点を共有する程度で、プログラムはそれぞれ独自のものとする。
- ・ 現場での問題点などを議論するのがよい。
- ・ ある程度項目について関連性を持たせることで通常の WS との整合性が取れる。
- ・ 実際の実務実習における教育指導に関係することや解決が必要な問題などについて討論（講演が付随するなら尚良い）するのが望ましい。
- ・ 通常の WS へのフィードバックが必要である。
- ・ 現行システム、カリキュラムの問題点を抽出し、薬学協議会などに修正案の提示ができることが望ましい。
- ・ 通常の WS よりも発展的なテーマや実践的なテーマが望ましい。

(8) 内容

- ・ 内容にとらわれず、定期的に来ることが重要である。
- ・ これまであまり取り扱っていないニーズの部分掘り起こすような内容が望ましい。
- ・ KJ 法に加えて、「PCM 法」や「World Cafe」の手法を取り入れるとよい。

- ・ 多職種連携のテーマが望ましい。
- ・ これまでにない教育手法を修得できるものがよい。
- ・ 実務実習の実施で生じた問題点を取り上げる（教育的な講義・解説は余り含めない）。
- ・ KJ 法などで、現場実習で実際にあった問題点を抽出して、それらについて解決策等を検討していく内容が望ましい。
 - 1) 実務実習コアカリ LS の実施状況に関する現状認識と、実施しにくい LS への対応
 - 2) 学生の実務実習に対するニーズに関する現状認識と、指導しにくい学生への対応
- ・ 参加者に事前に実務実習モデル・コア・カリキュラムのうち1つの「学習目標」を提示して実際に行っている学習方略と評価方法を持ち寄り、SGD で理想の学習方略と教育評価に仕上げる。プロダクトはデータベース化して共有化できるようにする。
- ・ 効果的な実務実習を行うにはどうすればよいかをテーマにして、KJ 法、SGD を行う。
- ・ 「学習者中心の教育について考えよう」などをテーマとする。
- ・ 薬学生実務実習の延長線上には、新人薬剤師の教育や生涯教育がある。これらも視野に入れた議論ができるとよい。

その他の提案多数

(9) その他

- ・ 内容を規定せずに、フリートーキングの時間も持つ事も必要である。
- ・ それぞれのモデル・コア・カリキュラムの必要性、コマ数の妥当性について議論すべきである。
- ・ アドバンスト WS の必要性は充分感じているが、全国・地区単位で開催した時の参加者を想像すると、既にその必要のない中心にいる者の集まりになってしまう。各大学や各府県が必要と感じたら府県病薬・府県薬・大学または合同での行事として関係団体の薬剤師・大学教員の構成でみんなが参加できる環境で開催した方が効果的である。
- ・ タスクフォースは、テーマに対して明確なアドバイスができ、会終了後も検討された課題の対応策について検証等の活動を指導できることが望ましい。
- ・ 現場の薬剤師自身が仕事についてどう取り組むのか、国民に対して何を提供していくのか、地域に対してどう向き合うのかについて地域ごとの実情にあった議論を行い、参加者に何を持ち帰ってもらうのかを議論して開催したい。WS で薬学教育を扱っても現場の薬剤師の業務レベルが向上していないと意味がない。
- ・ 薬学教育を離れて、現実の病院や薬局の問題や課題についても取り上げられるようなアドバンスト WS があってもよい。

4. その他、ワークショップに関するご意見をご自由にお書きください。

- ・ 初期に WS に出席された方々には、WS の内容を開示することに対して制限をかけてきた。最近では職場に戻ったら活用してほしいと変わってきたが、初期の受講者に対してこの変化を伝達できていない可能性がある。WS 主催者の姿勢の変化には、すでに実習が始まったからという理由があるが、そのことを速やかに伝えるべきである。
- ・ WS 受講者には、実習生を指導していただくということに加え、社会に対して薬学の変化を積極的に伝えていただくという役割も有るはずである。6年制に理解を示さない薬剤師や関連の方々も多くおられるであろうが、WS 受講者には、それらの方々に積極的に薬学の変化を伝えていただき、協力者となっていただく努力をしていただきたい。世の中が変わって初めて、6年制の意義があるのであるから、受講者に多くを期待したい。そのように考えると、WS は可能な限り沢山行るのが6年制薬学の変化を効果的に伝えることにつながるものと思われる。ライセンスというニンジンの力を借りて、可能な限り早く多くの方々に変化を伝えていくのが良いと思う。
- ・ WS の最大のメリットは、大学教員・病院薬剤師・開局薬剤師がそれぞれ違う立場から、後輩を育てるという共通のテーマで薬学教育を考え、SGD によるお互い時間を共有する事であると考えられる。しかし一度認定実務実習指導薬剤師の資格を取得すると、ワークショップのような三者での議論の場が皆無か、または極端に少なくなっているのが現状である。今後、認定実務実習指導薬剤師の認定期間の更新時に行うであろう研修会や、検討中のアドバンスト WS の在り方など、再度実務実習受け入れ指導体制が重要になってくるのではなかろうか。
- ・ 職域の枠を超えて議論できる機会が WS であり、地域差はあってもそのために地区調整機構の担う役割は今後も大きい。
- ・ WS から学ぶことがとてもたくさんある。学んだことについて、WS の経験者間で意見交換を行い、共有化を図るために、アドバンスト WS が必要である。
- ・ タスクフォースの更新制も視野に入れて、早急に認定取得者を対象にした新たなスキルアップ集会の内容をパッケージにしておく必要がある。
- ・ アドバンスト WS という名称で実務実習の改善と充実化を目的とした各地区単位での WS の開催を中央から促すことが必要である。
- ・ WS に用いる教材や資料の扱いについて、統一する必要がある。また、受講者に対する配布を認めるかどうかについても統一した申し合わせが必要である。
- ・ WS を経験しても実務実習を担当する機会がない指導薬剤師がいる。できるだけ多くの指導薬剤師に実務実習を経験してもらい、その必要性を理解してもらえるようにすべきである。
- ・ WS は、実務実習実施において重要な役割を果たしている事に異論はない。したがって、今までのノウハウを大いに利用しながら、さらに発展していくことを願う。同時

に、相応の時間が経過して WS を支える側のタスクフォースにマンネリ化などによる油断なども出てくる時期であるかもしれない。これらのことも留意しながら、次の段階へ進んで行けることを願う。

- ・ 情報交換会は有意義であるが、今後経費も考えればアルコールなしで軽めにするほうがよい。
- ・ 薬剤師会、病院薬剤師会、大学が一緒にやるべき事業であることをそれぞれの組織で再確認する必要がある。
- ・ 6年制を卒業して臨床現場に出た薬剤師に出来るだけ早く WS に参加してもらい、彼らが受けた実務実習の問題点等を速やかに数多く抽出すべきである。
- ・ タスクフォースとして参加していることが重要視されている大学は少ない。逆に言えば、タスクフォースとして参加するのが「趣味」と思われている場合もあるように思える。第三者評価等で、タスクフォース貢献を具体的に（「・・・こと」表現で）記述し、適正に評価すべきである。
- ・ 薬剤師の中で WS をご存じない方は、まだ多い。WS の運営は大変ではあるが、より多くの方が WS に参加されることが望ましい。
- ・ 現場の薬剤師の先生方は真面目に取り組むほど悩みも多いように思う。指導薬剤師数が一定数になったことを理由に WS 開催回数を減らすことには反対である。通常とは違う経験者の WS、あるいは問題点を絞って人員配分を変えた WS 等、柔軟性のある取り組みが望まれる。
- ・ 通常の WS の完成度は高い。したがって、開催費用を工夫しながら、是非これまでのプログラムを長く継続して欲しい。
- ・ 指導薬剤師の数は充足していると考える向きもあり、ワークショップは縮小傾向にあるが、指導薬剤師も経年劣化するのだから継続して養成する必要がある。
- ・ WS に参加されて、「こういう風にプランニングをすればいいんだ！」、「長期実務実習の指導が不安だったが道がみえてきた。」と衝撃を受けて帰られる先生は少なくないように思う。その中で WS に参加し、カリキュラムプランニングや教育技法を学んだ先生方でさえも、未だ解決できない問題点、あるいはまた新たに出現した問題点を解決する術がない、という現状がある。アドバンスト WS は、現実に存在する問題点解決への「道しるべ」をいう位置付けであれば、実務実習の指導者もその指導者を指導する立場の人もモチベーションが上がるのではないかと思う。
- ・ 6年制薬剤師は免許取得後「実務経験5年」で「半日程度の教育研修」によって、全員指導薬剤師で活躍いただけると思う。
- ・ タスクフォースを行うことにより、WS の本当の意味が理解できるので、参加後に修了者は、可能であればタスクフォースを行うか、事前練習会の見学を行うようにするとよい。
- ・ WS の開催に対する地区調整機構の負担軽減を是非お願いしたい。また、費用はかかる